

パーリ語の時制における āha, āhu, āhaṃsu

京都光華女子大学真宗文化研究所 特別研究員

稲葉 維摩

1. はじめに

パーリ語¹の過去時制の定動詞は「過去形」である(稲葉 2019 a)。この過去形を歴史的に見ると、サンスクリット語の未完了過去とアオリストにさかのぼる。サンスクリット語には完了という活用もあるのだが、パーリ語では、韻文にいくつかの語が現れるのを除いて、生きたカテゴリーでなくなる。しかし、動詞語根 ah-「言う、話す」の完了に由来する 3 人称単数 āha と 3 人称複数 āhu, āhaṃsu だけは、パーリ語で使われ続ける。本論文では、この āha, āhu, āhaṃsu の使われ方と文法の中での位置づけを調べて、次のことを述べる。パーリ語において、āha, āhaṃsu は過去形であり、過去と anterior の意味を表している。それに比べて āhu は、サンスクリット語の完了の性格を残した古い形式である²。

2. これまでの見方と本論文の立場

まず、パーリ語の āha, āhu, āhaṃsu がこれまでの辞書や研究でどのように理解されてきたかを確認しておく。概して、辞書や研究では、āha, āhu, āhaṃsu は例外的な動詞であり、基本的には現在や時間外のことを表すとされる。

Bechert (1958: 65–66) はサンスクリット語の完了を引き継ぐパーリ語として、āha, āhu, āhaṃsu と vidu (動詞語根 vid-「知っている」)を取り上げている。それによると、それらの引き継がれた完了形は一般に、時間外か過去を表す現在のように使われ、成立の遅い文献では āha, āhaṃsu がアオリスト(つま

り過去)の意味でも用いられる。

Bechert (1958:66) は āhaṃsu について、さらにコメントしている。āhaṃsu が使われている箇所 D II 180 と平行関係にあるサンスクリット語のテキスト (Waldschmidt 1986:316) では、別の動詞のアオリスト avocan「言った」(3人称複数)が使われている。このことから、この箇所の āhaṃsu はアオリストと言えるのだが³、その他には āhaṃsu がアオリストの機能で使われているように見えず、そのため完了のように感じられると述べている。

CPD (s.v. “āha”) では、āha は大体においてパーリ語の時制体系を外れていると言われる。また、CPD は本論文の例文 (8a) と (11) をあげていて、(8a) を “present”、(11) を “present > extra-temporal” としている。

Cone (2001:s.v. “āha 1, āhu 1”) は、完了は現在と過去と不定の時間を表すとし、Hinüber (2001:§480) は現在の機能で使われることを一言する。

どうして āha, āhu, āhaṃsu は、現在や時間外のことを表すと言われるのだろうか。それは、サンスクリット語の完了に由来するからである。ヴェーダ語の ah-の完了は常に現在時制の用法であり、また特に発話の時間的關係を示すよりも内容の方を導く場合には、一般的な、時間に関わらない使われ方をする (Kümmel 2000:115-116)。古典サンスクリット語でも、ah-の完了は現在を表すと言われる⁴ (Speijer 1886:§331)。つまり辞書や研究によれば、パーリ語の āha, āhu, āhaṃsu はサンスクリット語の動詞語根 ah-の完了が表す意味をそのまま引き継いでいるということになる。

確かに āha, āhu, āhaṃsu にはサンスクリット語と共通の使われ方があるけれども、単に過去を表す場合もある。これまではサンスクリット語に基づいてパーリ語の āha, āhu, āhaṃsu を評価してきたと言えるのだが、サンスクリット語とパーリ語では文法が異なる。そこで本論文では、実際の使われ方をもとに、パーリ語の時制から āha, āhu, āhaṃsu を捉えていく。

なお本論文は、パーリ語が伝える文献の内、経というカテゴリーに属する文献を研究範囲にした。経は仏教の最も基本的な文献カテゴリーの1つである。ブッダや弟子達の言行録であり、古いものから新しいものまで、多くの物語を

伝えている。そのため、パーリ語研究の基礎的なテキストになっている。

3. パラダイム

それではまず、問題の動詞のパラダイムを見てみよう。この動詞には1人称の活用がなく、2人称複数もない。2人称単数の明確な例は Mil 77 だけと言え、辞書があげる他の例は解釈が分かれそうである⁵。そのため、この動詞の基本的な活用は3人称ということになるのだが、複数形には2つの形がある。これには分布があり、āhu は韻文にだけ現れる。āhamsu は3例のみ韻文に現れる他は、散文で使われる。

| | 単数 | 複数 |
|-----|-------|-----------------------|
| 2人称 | (āha) | |
| 3人称 | āha | āhu (韻文), āhamsu (散文) |

ここで注目したいのは āhamsu である。サンスクリット語の完了を見てみると、3人称単数 āha, 3人称複数 āhūr という活用である⁶。3人称単数の āha がパーリ語の āha と一致し、複数の āhūr がパーリ語の āhu と一致する⁷。これらはサンスクリット語の語形をそのまま引き継いでいるのだが、āhamsu はサンスクリット語に対応する形がない。āhamsu はパーリ語で典型的な過去形の語尾-*msu* を持っていて、散文を中心に現れる。パーリ語の韻文にはサンスクリット語に通じる古風な語形が多く使われるのに対し、散文にはサンスクリット語にないパーリ語オリジナルの形が多く現れる。そのため、韻文の方が散文より古いと一般的に考えられている。つまり、āhamsu はパーリ語で新しく生まれた形である。そして、この明確な過去形をパラダイムに持っていることから、問題の動詞はパーリ語で過去形として認識されていると考えることができる。

このことを踏まえて、次に、稲葉 (2019 a) で述べたパーリ語の時制体系を見てみたい。稲葉 (2019 a) では、現在時制と過去時制が次の表に示した関係

| 時制の名称 | 形式 | 機能上の有標性 | 基本的意味と用法 |
|-------|-----|---------|---|
| 現在 | 現在形 | 無標 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 基本的意味：不定 ・ 発話時の事柄 ・ 習慣 ・ 時に関わらない一般的・普遍的な事柄、格言 ・ 過去の習慣、継続、反復 |
| 過去 | 過去形 | 有標（過去） | <ul style="list-style-type: none"> ・ 基本的意味：過去 ・ anterior（副詞や文脈によって発話時との関係が読み取れる場合） |

を持っていることを述べた⁸。

過去時制が表す意味を見てみると、過去が基本的な意味であり、副詞や文脈によっては anterior も表す。anterior とは、基準となる時点より前に起きた事柄が何らかの点で基準時点にも関連する意味で、「(動作) パーフェクト」や「完了」とも呼ばれる⁹。āha, āhu, āhaṃsu が過去形ならば、これらの意味を表していると予測できる。それでは実際の使われ方を見て、このことを確かめていこう。

4. āha, āhaṃsu の使われ方

4.1. 過去

まず、āha, āhaṃsu を見ていく。これら2つはともに散文で使われるのに対し、āhu は韻文にしか現れないという分布があるからである。初めに āha, āhaṃsu が過去を表す例を見ていこう。本論文の例文では、現在形を下線で、āha, āhu, āhaṃsu を含む過去形を下線とボールド体で、その他注目する語を適宜ボールド体で和訳とともにマークする¹⁰。

(1) ではブツダが言わなかったことと言ったことが対比されていて、それぞれを āha と過去形 abhāsi 「話した」が導いている。(2) では、ゴーパカ・モツガッターナ・ブラーフマナとアーナンダの対話を振り返っている。ここでも、āha が過去形の avoca 「言った」と並んでいて、対話を導いている。このこと

から、(1) や (2) の āha は他の過去形と同等に使われていると言える。

(1) D I 143 api ca me bho evaṃ hoti. samaṇo gotamo na evaṃ āha evaṃ me sutan ti vā evaṃ arahaṭi bhavitun ti vā. api ca samaṇo gotamo evaṃ tadā āsi itthaṃ tadā āsi tv eva abhāsi. 「私に次のような考えがある。『沙門ゴータマはこう言わなかった、「私はこのように聞いている」とか「このようになってよい」と。一方、沙門ゴータマは「その時この通りだった、その時こうだった」とだけ話した』」。

(2) M III 8 kā ca pana vo antarākathā vippakatā ti. idha maṃ brāhmaṇa gopakamoggallāno brāhmaṇo idam āha. atthi nu kho bho ānanda ekabhikkhu pi tehi dhammehi sabbena sabbam sabbathā sabbam samannāgato yehi dhammehi samannāgato so bhavaṃ gotamo ahosi arahaṃ sammāsambuddho ti. evaṃ vutte ahaṃ brāhmaṇa gopakamoggallānaṃ brāhmaṇaṃ etad avoca. 「『君達はどんな会話をしていたのかね』と。『ブラーフマナよ、ここで、ゴーパカ・モッガッラーナ・ブラーフマナが私にこのことを言った。「一体、アーナンダ殿、阿羅漢、正覚者となった、かのゴータマ様が備えている諸々のダンマをあらゆる点で、あらゆる仕方ですべて備えている比丘は一人でもいるのかね』と。こう言われたので、ブラーフマナよ、私はゴーパカ・モッガッラーナ・ブラーフマナに次のことを言った』」。

次の (3), (4) は物語である。パーリ語の物語は過去形で進んでいく。過去形は物語の筋を進めて場面を展開させていく前景を表す (稲葉 2019 b)。(3) はパーリ語の典型的な物語である。過去形で upasaṃkhami 「近づいた」、sammodi 「喜んだ」、nisīdi 「座った」、aṭṭhāsi 「立った」、avoca 「言った」と動作が順に進んでいくのだが、その中に āha が使われている。(4) は財産をマハーゴヴィンダ・ブラーフマナに送ることを考え、そのことを本人に告げる場面だが、ここでも過去形 samacintesuṃ 「考えた」に続いて、āhaṃsu が並んでいる。ここでは āha も āhaṃsu も、次々に進んでいく動作の 1 つになっている。

こういった例から、他の過去形と同様、āha, āhaṃsu も場面を進めていることがわかる。

(3) M II 158 atha kho so ghoṭamukho brāhmaṇo yen' āyasmā udeno ten' upasaṃkamaṃ. upasaṃkamtivā āyasmatā udenena saddhiṃ sammodi. sammōdanīyaṃ kathaṃ sārāṇīyaṃ vītisāretvā āyasmantaṃ udenaṃ ekamantaṃ anucaṅkamamāno evaṃ āha. ambho samaṇa na 'tthi dhammiko paribbājo. evaṃ me ettha hoti. ... ti. evaṃ vutte āyasmā udeno caṅkamā orohitvā vihāraṃ pavisitvā paññatte āsane nisīdi. ghoṭamukho pi kho brāhmaṇo caṅkamā orohitvā vihāraṃ pavisitvā ekamantaṃ atthāsi. ekamantaṃ thitaṃ kho ghoṭamukhaṃ brāhmaṇaṃ āyasmā udeno etad avoca. 「そこで、かのゴータムカ・ブラーフマナは長寿なる者ウデーナのところに近づいた。近づいてから、長寿なる者ウデーナと一緒に喜んだ。喜ばしく、盛り上がる話を広げて、長寿なる者ウデーナの方についてそぞろ歩きしながらこう言った。『やあ、沙門よ、遊行はダンマに適っていない。そのことについて私にこのような考えがある。…』と。こう言われると、長寿なる者ウデーナはそぞろ歩きから外れて精舎に入り、用意された席に座った。ゴータムカ・ブラーフマナもそぞろ歩きから外れて精舎に入り、一方に立った。一方に立ったゴータムカ・ブラーフマナに長寿なる者ウデーナは次のことを言った」。

(4) D II 244–245 atha kho bho chakkhattiyā ekamantaṃ apakkamma evaṃ samacintesuṃ. ime kho brāhmaṇā nāma dhanaluddhā. yan nūna mayaṃ mahāgovindaṃ brāhmaṇaṃ dhanena sikkheyyāma ti. te mahāgovindaṃ brāhmaṇaṃ upasaṃkamtivā evaṃ āhaṃsu. samvījati kho bho imesu sattasu rajjesu pahūtaṃ sāpateyyaṃ. tato bhoto yāvatakena attho tāvatakaṃ āhareyyatan ti. 「そこで、6人のクシャトリア達は一方を離れてこう考えた。『このブラーフマナ達は財産に貪欲だ。我々はマハーゴヴィンダ・ブラーフマナを財産で支援してはどうだろうか』と。彼らはマハーゴヴィンダ・ブラーフマナに近づいて、こう言った。『これら7つの領地には豊富な財産がありま

す。そこから、あなたに必要な限りのものを持っていかれてはどうでしょう』と」。

(5) は転輪王マハースダッサナの物語である。物語の最初に、副詞 *bhūta-pubbam* 「昔」が使われて、過去の話であることが示されている。王と家長との対話であり、過去形 *avoca* 「言った」と *āha* が両者の発言を導いている。対話であるから、両者の発言は順番に進んでいくことがわかる。また、この物語と並行的な内容を持つ (6) では、(5) で 2 回使われている *avoca* の内の後者が *āha* になっている。このことから、両者は過去形として交代可能と考えることができる。

(5) D II 176–177 *bhūtapubbam* ānanda rājā mahāsudassano tam eva gahapatiratanam vīmaṃsamāno nāvaṃ abhirūhitvā majjhe gaṅgāya nadiyā sotaṃ ogāhetvā gahapatiratanam etad avoca. attho me gahapati hiraññasuvaṇṇenā ti. tena hi mahārāja ekaṃ va tīraṃ nāvā upetū ti. idh’ eva me gahapati attho hiraññasuvaṇṇenā ti. atha kho taṃ ānanda gahapatiratanam ubhohi hatthehi udakaṃ omasitvā pūraṃ hiraññasuvaṇṇassa kumbhiṃ uddharitvā rājānaṃ mahāsudassanaṃ etad avoca. alam ettāvātā mahārāja. katam ettāvātā mahārājā ti. rājā mahāsudassano evam āha. alam ettāvātā gahapati. katam ettāvātā gahapati. pūjītam ettāvātā gahapatī ti. rañño ānanda mahāsudassanassa evarūpaṃ gahapatiratanam pāturahosi. 「昔、アーナンダよ、マハースダッサナ王はその家長の中の宝のことを考察しながら、船に乗ってガンジス河の中央で流れに入り、家長の中の宝に次のことを言った。『家長よ、金や金銭が私に入り用だ』と。『それでは、大王よ、船でどこかの岸にお近づきください』と。『家長よ、ここでこそ金や金銭が私に入り用ののだ』と。そこで、アーナンダよ、その家長の中の宝は両手で水に触れて、満杯の金や金銭の瓶を持ち上げ、マハースダッサナ王に次のことを言った。『これで十分でしょうか、大王よ。これで事足りているでしょうか、大王よ』と。マハースダッサナ王はこう言った。『これで十分だ、家長よ。これで事足りている、家

長よ。これで供養されている、家長よ』と。マハースダッサナ王にはこの
ような家長の中の宝が現れた」。

(6) M III 175 **bhūtapubbaṃ** ... atha kho naṃ bhikkhave gahapatiratanam ub-
hohi hatthehi udakaṃ omasitvā pūraṃ hiraññasuvaṇṇassa kumbhiṃ uddharitvā
rājānaṃ cakkavattiṃ evam **āha**. alam ettāvata mahārāja. ... ti. 「昔、…。そこ
で、比丘達よ、その家長の中の宝は両方の手で水に触れて、満杯の金や金
銭の瓶を持ち上げ、転輪王にこう言った。『これで十分でしょうか、大王
よ。…』と」。

(7) は (6) の続きである。ここでは āhaṃsu が使われている。

(7) M III 176 **bhūtapubbaṃ** bhikkhave rājā cakkavattī caturāṅginiyā senāya
uyyānabhūmiṃ **niyyāsi**. atha kho bhikkhave brāhmaṇagahapatikā rājānaṃ cak-
kavattiṃ upasaṃkamitvā evam **āhaṃsu**. ataramāno deva yāhi yathā tam mayaṃ
cirataram passeyyāmā ti. rājā pi bhikkhave cakkavattī sārathim **āmantesi**. 「昔、
比丘達よ、転輪王は 4 部隊からなる軍とともに遊園に出発した。そこで、
ブラーフmana達、家長達は転輪王に近づいてこう言った。『急がずに行き
ましょう、王よ。私達があなたをずっと見ていられるように』と。比丘達
よ、転輪王も御者に告げた」。

4.2. anterior

以上に、āha, āhaṃsu が過去を表していることを見た。次に、両者が anterior
を表すことを見ていこう。先に述べたように、パーリ語の過去形は、文脈から
現在との関連性を読み取れる場合や現在を指す副詞の共起によって、anterior
を表す。(8 ab) を見てみると、āhaṃsu が現在を指す副詞 etarahi 「今」と共起
している。現在を指す副詞の共起は、anterior の主な特徴である。従って、(8
ab) の āhaṃsu は anterior を表していると理解できる。

(8) a. D III 86 tesam vaṇṇātimānapaccayā mānātimānājātikānaṃ rasapaṭhavī

antaradhāyi. rasāya paṭhaviyā antarahitāya **sannipatiṃsu.** sannipatitvā **anuttunim̐su.** aho rasam̐ aho rasan ti. tad **etarahi** pi manussā kiñcid eva sādhu rasam̐ labhitvā evam **āhaṃsu.** aho rasam̐ aho rasan ti. tad eva porāṇam̐ aggaññam̐ akkharam̐ **anupatanti.** na tv ev' assa attham̐ **ājānanti.** 「ヴァルナに対する傲慢さによって、過度の慢心を性質とする彼らから、ラサーという大地¹¹が消えた。大地ラサーが消えたので、人々は落ち合った。落ち合ってから口々に叫んだ。『ああ、ラサーを！ああ、ラサーを！』と。それで今でも、人々は何かい味を享受するとう言っている。『ああ、ラサ（味）を！ああ、ラサ（味）を！』と。まさにそのいにしへの、原初の音声が伝わっている。けれどもこのことの意味を人々は知らない」。

b. D III 88 tad **etarahi** pi manussā kenacid eva dukkhadhammena puṭṭhā evam **āhaṃsu.** **ahu** vata no. **ahāyi** vata no ti. 「それで今でも、人々は何か苦しいダンマにぶつかるとう言っている。『ああ、私達にはあった！ああ、私達にはなくなってしまうた！』と」。

anterior には、英語の現在完了が表す 4 つの意味が典型とされる場合がある。過去の事柄が現在まで続いている「継続」(universal, continuative)、過去から現在までのある時点に事柄が起こったことを表す「経験」(experiential, existential)、過去の事柄の結果が現在に関連する「結果」(resultative)、現在の直前に起きた事柄を表す「最近の過去」(recent past, hot news) である (Comrie 1976 : 52–65, Dahl 1985 : 129–153 など)。この内、āha, āhaṃsu は継続と経験の意味に合うと考えられる。

ここで少し、具体的な例文を用いながら、継続と経験について簡単に紹介しておきたい。Dahl (1985) の調査がわかりやすいと思われるので、それを例にしよう。Dahl (1985) には、時制とアスペクトを調査するための質問が設定されている。継続の表し方を調べる質問は、Q.148 “(Of a coughing child :) For how long has your son been coughing?” (Dahl 1985 : 132) である。英語では、

“He has been coughing for an hour” と現在完了が使われる。一方、多くの言語では現在時制や無標のカテゴリーを使う (Dahl 1985: 136–137)。日本語はどうだろうか。この場合なら「あの子は1時間せきをしている」と言えるだろう。

経験に関しては、Q.42 “Q: You MEET my brother (at any time in your life until now)?” (Dahl 1985: 132) という質問がある。“MEET” に当たる部分にどんな形式が使われるかを問題にしている。英語では現在完了を使う。日本語では「君の弟に会っている」または「会ったことがある」と言う¹²。

それではこのことをふまえて āha, āhaṃsu を見てみよう。(9), (10) はいずれも、ある沙門・ブラーフマナの見解を紹介している。見解や主義主張というもの、普通、過去から今まで考えたり主張したりしてきたことだと言える。過去のある時点で何らかの見解が生まれ、現在まで主張し続けてきたというのは anterior、特に継続の意味に合うだろう。

(9) M I 401–402 tesam yeva kho gahapatayo samaṇabrāhmaṇānaṃ eke samaṇabrāhmaṇā ujuvipaccanīkavādā. te evam āhaṃsu. atthi dinnam atthi yiṭṭham ... ti. 「家長達よ、ある沙門・ブラーフマナ達は、その沙門・ブラーフマナ達に真っ向から対立する主張を持っている。彼らはこう言ってきた¹³。『布施の結果は存在する。祭式の結果は存在する。…』と」。

(10) D I 14–15 idha bhikkhave ekacco samaṇo vā brāhmaṇo vā ātappam anvāya padhānam anvāya anuyogam anvāya appamādam anvāya sammāmanasikāram anvāya tathārūpaṃ cetosamādhim phusati yathā samāhite citte anekavihitam pubbe nivāsaṃ anussarati. ... iti sākāram sa-uddesaṃ anekavihitam pubbe nivāsaṃ anussarati. so evam āha. sassato attā ca loko ca vaṅṅho kūṭaṭṭho esikaṭṭhāyitthito. 「比丘達よ、この世で、ある沙門あるいはブラーフマナが努力に従って、尽力に従って、専心に従って、不放逸に従って、正しい思考に従って、集中した心に以前の様々な住居を順に思い出すような心の集中(三昧)に達する。…。このように、形を備え、説明を備えた、以前の

様々な住居を順に思い出す。彼はこう言ってきた。『アートマンと世界は常住で、不毛で、頂上において、柱が立っているように留まっているものだ』。

(10) では、āha, āhaṃsu 以外の動詞が現在形である。(10) は過去の話でなく、ある沙門・ブラーフマナの典型を述べているため、現在形が使われている。このような文脈は一見すると過去と関係ないように見えるが、この使われ方も anterior として理解できる。(11) を見てみよう。(11) は如来の典型を示している。典型は、過去に何度も同じことがあったからこそ典型になっているはずである。如来というものは、縁起の法をさとり、それを人々に説き示す。āha 以外の動詞は現在形だが、anterior の点から見れば、āha は、如来が今に至るまで縁起という真理を見るよう人々に説いてきたということを表していると言える。これも継続である。

(11) S II 25–26 taṃ tathāgato abhisambujjhati abhisameti. abhisambujjhivā abhisametvā ācikkhati deseti paññāpeti paṭṭhapeti vivarati vibhajati uttāṅkaroti. passathā ti cāha. 「それ（縁起）を如来は完全にさとり、達成する。完全にさとり、達成して、説き、示し、知らせ、確立し、あらわにし、区別し、広げる。そして『見よ』と言ってきた」。

同じことが (12) にも言える。(12) は転輪王の話だが、(5–7) のような過去の人物ではなく、転輪王の典型を述べている。

(12) M III 172–173 atha kho taṃ bhikkhave cakkarataṇaṃ puratthimaṃ disaṃ pavattati. anvadeva rājā cakkavattī saddhiṃ caturaṅginīyā senāya. yasmim kho pana bhikkhave padese cakkarataṇaṃ patitṭhāti tatra rājā cakkavattī vāsaṃ upeti saddhiṃ caturaṅginīyā senāya. ye kho pana bhikkhave puratthimāya disāya paṭirājāno te rājānaṃ cakkavattim upasaṃkamitvā evaṃ āhaṃsu. ehi kho mahārāja. svāgataṃ mahārāja. sakan te mahārāja. anusāsa mahārājā ti. rājā cakkavattī evaṃ āha. pāṇo na hantabbo. adinnaṃ nādāttabbaṃ. ... ti. 「さて、比丘

達よ、その輪宝は東の方角に進む、後には転輪王が4部隊からなる軍隊とともに。また、比丘達よ、輪宝が止まる地方で転輪王は宿営する、4部隊からなる軍隊とともに。また、比丘達よ、東の方角にいる対立する王達は転輪王に近づいて、こう言ってきた。『さあ、大王よ。ようこそ、大王よ。あなたのものです、大王よ。統治なさい、大王よ』と。転輪王はこう言ってきた。『生き物は殺されるべきでない。与えられていないものは取られるべきでない。…』と』。

(13) は、仏教において避けるべき十悪の内の1つである妄語を語る者の説明である。以前にうそをついたことがあったり、つき続けてきた者に妄語者というレッテルがはられる。āha は、過去から現在に至るまでの間にうそをつたりつき続けてきたことを表している。これは、経験や継続に当たる。

(13) M I 286 idha gahapatayo ekacco musāvādī hoti. sabhāgato vā parisagato vā nātimajjhagato vā pūgamajjhagato vā rājakulamajjhagato vā abhinīto sakkhiputt̐ho. evaṃ bho purisa yaṃ jānāsi taṃ vadehī ti. so ajānaṃ vā āha jānāmī ti. jānaṃ vā āha na jānāmī ti. apassaṃ vā āha passāmī ti. passaṃ vā āha na passāmī ti. itī attahetu vā parahetu vā āmisakiñcikkhahetu vā sampajāna-musā bhāsita hoti. 「この世で、家長達よ、ある者が妄語者となる。集会にいるか、取り巻きの中にいるか、親族の中にいるか、議会の中にいるか、王族の中にいるかして、引き出され、目撃者として質問されている。『君、知っていることをその通りに話しなさい』と。彼は知らないのに『知っている』と言ったり、知っているのに『知らない』と言ったり、見ていないのに『見ている』と言ったり、見ているのに『見ていない』と言ったことがある／言ってきた。この通り、自分が原因で、あるいは他人が原因で、あるいは何かめぼしいものが原因で、故意に誤って話す者になる』。

4.3. 韻文に現れる āhaṃsu

āhaṃsu は3例だけ韻文に見つかる。それを確認しておきたい。āhaṃsu が現

れる韻文はいずれも、本論文が扱う文献の中で、成立年代が新しいと考えられている文献にある。

(14) は、業の果報を受けた者の話を聞いて、理解力ある人々 (narā sapaññā) が言ってきたこと、つまり業の果報が真実であると確認するセリフである。業の果報は昔からずっと語り継がれてきた。従って、継続の意味を読み取れる。

(14) Vv v. 1249 saccam kirāahaṃsu narā sapaññā | anaññathā vacanaṃ paṇḍitānaṃ /

yahiṃ yahiṃ gacchati puññakammo | tahiṃ tahiṃ modatī kāmakāmī //

「理解力ある人々は真実を言ってきた、賢者達の言葉を違わずに。

福德ある業を備えて行くところはどこでも、思い通りのことを備えて喜ぶ」。

(15), (16) は物語である。(15) の1行目には過去形 avoca 「言った」が使われていて、āhaṃsu と並んでいる。これらの āhaṃsu は過去を表している。

(15) Ap 530 v. 9 tadā avoca sā sabbam | yathāparivattakkaṃ /

tāyo pi sabbā ahaṃsu | yathāparivattakkaṃ //

「そこで、彼女（ゴータミー）は考察した通りにすべてのことを言った。

彼女ら（500人の比丘尼達）も皆、考察した通りに言った」。

(16) Ap 540 v. 151 devā nāgāsuraṃ brahmā | samvigga' ahaṃsu tāvade /

aniccā vata saṅkhārā | yathāyaṃ vilayaṃ gatā //

「神々、ナーガとアスラ達、梵天はその時、震えて言った。

『ああ、諸行無常だ！これが消滅した通りに！』」。

5. āhu の使われ方

以上に見た通り、āha, āhaṃsu は過去と anterior を表していた。次に、

āhaṃsu と同じ3人称複数である āhu の使われ方を見ていく。まず、āhu と āhaṃsu の大きな違いとして、āhaṃsu は主に散文に現れるが、āhu は韻文にだけ現れるということ念頭に置いておきたい。パーリ語の韻文には、成立が古いと考えられているものはもちろん、新しいと考えられているものにも古風な語形が多く現れる。āhu も歴史的に古い語形であるため、この傾向に沿っているとと言える。

次に āhu の使われ方を見ていくと、āha, āhaṃsu にあったような、明確に過去を表していると言える例は、成立が遅いと考えられている文献に1例だけしか見つからない。(17) がその例なのだが、これは1人称語りの物語である。

(17) Cp v. 280 te mayhaṃ vacanaṃ sutvā | pitu mātū ca sāvayum /
mātā pitā evam āhu | sabbe va pabbajāma bho //
「彼らは私の言葉を聞いて、父と母に伝えた。
母と父はこう言った。『君、私達みんなで出家しよう』」。

対して、anterior に当たる例は多く見つかる。例えば、(18 ab) は主義主張である。

(18) a. Sn v. 903 yam āhu dhammaṃ paraman ti eke | tam eva hīnan ti
panāhu aññe /
sacco nu vādo katamo imesaṃ | sabbe va hīme kusalā vadānā //
「ある者達が最高だと言ってきたダンマを他の者達は劣っていると言ってきた。
彼らは皆、巧みに述べているのだが、一体、この内のどれが真実の主張なのか」。

b. v. 904 sakaṃ hi dhammaṃ paripuṇṇam āhu | aññassa dhammaṃ pana hīnam
āhu /
evam pi viggayha vivādiyanti | sakaṃ sakaṃ sammutim āhu saccam //
「自分のダンマを完全だとある者達は言ってきた。しかし他の者のダンマ

は劣っていると言ってきた。

このように区別して、彼らは議論し合っている。各々の合意を真実だと言ってきた」。

(18 ab) は成立が最も古いと言われる文献だが、そうでない文献にも anterior の例はある。例えば、次の (19) では、āhu と副詞 ajja 「今」が共起している。

(19) Pv v. 544 dvay’ **ajja** kammānaṃ vipākam **āhu** | sukhaṣṣa dukkhaṣṣa ca vedanīyaṃ /

tā devatāyo paricārayanti | paccanti bālā dvyataṃ apassino //

「今、二種の業の異熟を言った。楽と苦の感受されることになる〔業〕である。

そこで、神格達は楽しんでいる。二種であることを見ない愚か者達は〔業の異熟を〕受けている」。

過去を表す例は (17) だけであるため、例外的としておく。そうすると、āhu は anterior を表すと言えそうである。だが、āhu はむしろ、ヴェーダ語の ah-の完了における、発話の時間関係よりも内容の方に重きが置かれている (Kümmel 2000: 116) という意味を残していると考えられる。(20), (21) を見てみよう。(20) は、1, 2 行で言われた人を世間では一般的に何と呼ぶかということ説く。3 行目には loke 「世間で」(処格単数) という語がある。(21) はブッダと呼ばれる人がどのようなものなのかを教えている。いずれも、3 人称複数に当たる動作主はそれほど重要でなく、あえて補うなら「人々」ということになるだろう。

(20) Sn v. 816 eko pubbe caritvāna | methunaṃ yo nisevati /

yānaṃ bhantaṃ va taṃ **loke** | hīnaṃ **āhu** puthujjanaṃ //

「以前は独り行いが、後で性交に従う者を

世間では、迷った乗り物のように、劣った凡夫と言う」。

(21) Sn v. 517 kappāni viceyya kevalāni | samsāraṃ dubhayaṃ cutūpapātaṃ /
vigatarajam anaṅgaṇaṃ visuddhaṃ | pattaṃ jātikkhayaṃ tam **āhu** buddhan //

「すべての分別を、輪廻を、死没と転生の両方を判別して、

ちりを離れ、汚れなく、清浄で、誕生の消滅に到達した、その人をブッダ
と言う」。

このことから **āhu** は、誰がいつ言ったかということよりも、話題になって
いるものが世の中で一般的にどう言われているか、あるいは教義に基づいて正
しくは何と言うかということを表していると理解できる。過去から今まで言わ
れてきたという継続の意味とも言えるだろうが、やはり、発話の時間関係より
も内容の方に注目しているという方が合うと考えられる。(20), (21) は成立
年代が古いとされる文献だったが、この使われ方は文献の年代を問わない。参
考までに2例のみあげておきたい。以上のことから、**āhu** は形式だけでなく、
使われ方も歴史的な古さを残していると言える。

(22) Ja IV 339 v. 150 cando ca suriyo ca ubho sudassanā | gacchanti ob-
hāsayam antalikkhe /

parassa lokassa na te imassa | devā ti te **āhu** manussaloke //

「月と太陽、両者は美しく、空中で光を放ちながら行く。

それらはあの世のものであり、この世のものではない。人間界ではそれら
を神々と言う」。

(23) A I 165 v taṃ ve tamonudaṃ dhīraṃ | tevijjaṃ macchūyinaṃ /

hitam devamanussānaṃ | **āhu** ⁺sabbapahāyinaṃ¹⁴ //

「その人を、闇を払う人、思慮深い人、三明を備えた人、死を後にした人、
神と人間の利益、すべて〔の悪事〕を捨てた人と言う」。

6. まとめ

本論文では、サンスクリット語の完了に由来のあるパーリ語の動詞 āha, āhu, āhaṃsu が、パーリ語でどのように使われているのか、パーリ語の文法でどう位置づけられているのかを調べた。形態の点では、主に散文において、典型的な過去形の語尾を持つ āhaṃsu がパラダイムを作っている。使われ方を見ると、āha, āhaṃsu は過去と anterior の意味を表している。従って、āha, āhaṃsu はパーリ語の過去形である。

一方、āhu は古い形式が残ったものである。āhaṃsu と同じ3人称複数だが、韻文にしか現れない。意味の点では、過去を表していると言える例文が成立の遅い文献に1つしか見つからない。āhu は anterior を表す他、基本的には発話の時間関係よりも内容の方に注目しているというヴェーダ語の使われ方に合っている。そのため、āhu はサンスクリット語の完了の性格を語形と意味の点で残した古い形式と考えられる。

凡例

D I 143 : The Dīgha Nikāya 第1巻 143 ページ。

“v.” あるいはページ数の後の “v” は、韻文 (verse) であることを表す。

パーリ語の韻文は基本的に4行詩である。引用の “|” は1, 3行めの区切り、“/” は2行めの区切り、“//” は4行めの区切りを表す。

略号と参考文献

A = Morris, Richard and E. Hardy. 1885–1900. *The Anguttara-Nikāya*. 5 vols. London : Pali Text Society.

Ap = Lilley, Mary E. 1925, 1927. *The Apadāna of the Khuddaka Nikāya*. 2 vols. London : Pali Text Society.

Cp = Jayawickrama, N. A. 1974. *Buddhavaṃsa and Cariyāpīṭaka*. London : Pali Text Society.

CPD = Trenckner, V., et al. 1924–2011. *A Critical Pāli Dictionary*. 3 vols. Copenhagen and Bristol : Pali Text Society.

D = Davids, T. W. Rhys and J. Estlin Carpenter. 1890–1911. *The Dīgha Nikāya*. 3 vols. London : Pali Text Society.

- Ja = Fausbøll, V. 1877–1896. *The Jātaka : Together with its Commentary, Being Tales of the Anterior Births of Gotama Buddha*. London : Trübner.
- M = Trenckner, V. and Robert Chalmers. 1888–1899. *The Majjhima-Nikāya*. 3 vols. London : Pali Text Society.
- Mil = Trenckner, V. 1880. *The Milindapañho : Being Dialogues between King Milinda and the Buddhist Sage Nāgasena*. London : Williams and Norgate.
- Mp = Hardy, Edmund, Max Walleser, and Hermann Kopp. 1924–1956. *Manorathapūraṇī : Buddhaghosa's Commentary on the Aṅguttara-Nikāya*. 5 vols. London : Pali Text Society.
- Nidd I = La Vallée Poussin, L. de and E. J. Thomas. 1916–1917. *Mahāniddeśa*. London : Pali Text Society.
- Pj II = Smith, Helmer. 1916–1918. *Sutta-Nipāta Commentary : Being Paramatthajotikā II*. 3 vols. London : Pali Text Society.
- Pv, Vv = Jayawickrama, N. A. 1977. *Vimānavatthu and Petavatthu*. London : Pali Text Society.
- S = Feer, Léon M. 1884–1898. *Saṃyutta-Nikāya*. 5 vols. London : Pali Text Society.
- Sn = Andersen, Dines and Helmer Smith. 1913. *The Sutta-Nipāta*. London : Pali Text Society.
- Th = Oldenberg, Hermann, Richard Pischel, K. R. Norman, and L. Alsdorf. 1966. *The Thera- and Therī-gāthā : Stanzas Ascribed to Elders of the Buddhist Order of Recluses*. London : Pali Text Society.
- Bechert, Heinz. 1958. Über den Gebrauch der indikativischen Tempora im Pāli. *Münchener Studien zur Sprachwissenschaft*, 3 : 55–72.
- Comrie, Bernard. 1976. *Aspect*. Cambridge : Cambridge University Press.
- Cone, Margaret. 2001. *A Dictionary of Pāli, Part I a–kh*. Oxford : Pali Text Society.
- Dahl, Östen. 1985. *Tense and Aspect Systems*. New York, N.Y. : B. Blackwell.
- Hinüber, Oskar von. 2001. *Das ältere Mittelindisch im Überblick, 2., erweiterte Auflage*. Wien : Verlag der österreichischen Akademie der Wissenschaften.
- Kümmel, Martin J. 2000. *Das Perfekt im Indoiranischen*. Wiesbaden : Reichert Verlag.
- Speijer, J. S. 1886. *Sanskrit Syntax*. Leiden : E.J. Brill (reprint, 1973, Delhi : Motilal Banarsidass).
- Waldschmidt, Ernst. 1986. *Das Mahāparinirvāṇasūtra : Text in Sanskrit und Tibetisch, verglichen mit dem Pali, nebst einer Übersetzung der Chinesischen Entsprechung im Vinaya der Mūlasarvāstivādins*. Kyoto : Rinsen Book.
- 稲葉維摩 2019 a 「パーリ語の直説法現在とアオリスト」『佛教學セミナー』109 : 67–87.
- 2019 b 「パーリ語の物語における現在時制と過去時制」『佛教學セミナー』110 : 55–73.

- 岡野潔 2004 「アッガンニヤ経の神話的食物の名 lasā / rasā / rasa」『印度學佛教學研究』52(2) : 858–851.
- 益岡隆志、田窪行則 1992 『基礎日本語文法—改訂版—』東京：くろしお出版。

註

- 1 パーリ語は中期インド・アーリヤ諸語の1つで、上座部仏教の文献を伝える古代インドの文献言語である。中期インド・アーリヤ諸語とは、サンスクリット語と比べて言語変化がある程度進んだ諸言語の総称である。なお本論文では、サンスクリット語という名称をヴェーダ語と古典サンスクリット語の総称として用いる。
- 2 本論文は、2019年9月7、8日に開催された第70回日本印度学仏教学会での発表をもとにしている。
- 3 ここで言われている avocan は、実は補いであって、実際の写本には欠けている (Waldschmidt 1986 : 34 の 87 番 3 行)。
- 4 Speijer (1886 : §331) によれば、まれに過去を表す場合もある。
- 5 CPD は Sn v. 839 の āha と Th v. 57 の āhu を 2 人称単数として用例にあげているが、Th v. 57 は bhū-「なる、生じる」という別の動詞の過去形である。Sn v. 839 の注釈では説明が別れている。Sn v. 839 はブッダが自身の教えをマーガンディヤに言うのだが、注釈書 Nidd I 187–188 は “na kathesi na bhaṇasi na dīpayasi na voharasi” と 2 人称の動詞に言い換えているため、āha を 2 人称に理解しているようだ。一方、もう一つの注釈書 Pj II 545 は “nāham kathemi” と 1 人称に解釈する。Sn v. 839 に続く v. 840 はマーガンディヤの発言で、ここにも āha が出てくるのだが、Nidd I 191 も Pj II 546 も v. 840 の āha に関しては 2 人称で説明している。だが実際のテキストを見ると、v. 839 は v. 838 katham nu dhīrehi paveditam tam 「一体、思慮深い者達によってそのことはどう言われているのか」という問いに対する返答であるため、v. 839 の āha は 2 人称や 1 人称ではなく、本論文の āhu と同様、正しい答えを導いているものだと考えられる。v. 840 の āha はその繰り返しである。なお、Mil 77 には 2 人称代名詞の tvam があるため、この āha は 2 人称と言える。Mil 77 atha kasmā tvam mahārāja evam āha 「大王よ、どうして君はこう言ったのか」。
- 6 ヴェーダ語のアクセントを付した。なお、ブラーフマナ文献以降では 2 人称単数 ātha, 3 人称双数 āhatur も現れる (Kümmel 2000 : 115)。
- 7 パーリ語では語末が母音に限られているため、āhu になる。
- 8 稲葉 (2019 a) では「形式」の欄にある名称を「直説法現在」と「アオリスト」にしていたが、両者をより正確と思われる「現在形」と「過去形」に変更した。
- 9 anterior はインド学・仏教学では馴染みのない用語かもしれないが、稲葉 (2019 a, 2019 b) に続き、本論文でもこの用語を使う。
- 10 否定文では、パーリ語の否定詞をマークしなかった。現在形は、直説法以外のムードをマークしなかった。
- 11 テキストの rasa- と rasā- の揺れについて、岡野 (2004) が写本の伝承から、女性名詞の固有名詞 rasā- 「ラサー」を正しい読みとしたのに従っている。

- 12 この「たことがある」は Dahl (1985: 139-142) も取り上げている。
- 13 先に継続を表す日本語を「せきをしている」としたのにどうしてここで「言ってきた」にしているのか、疑問視されることがあるかもしれないので、一言しておく。本文に見た通り、継続・経験という典型が立てられるけれども、その表し方は言語によって異なる。この「てきた」は意志動詞の場合、基準となる時点までの動作の継続を表す (益岡・田窪 1992: 112-113)。先の「ている」は動きの継続状態を表し、また経験・経歴も表す。この経験・経歴は「たことがある」によっても表される (益岡・田窪 1992: 114-116, 184)。こういったことをふまえて、「てきた」を選んだつもりである。だが、本論文の目的はパーリ語の仕組みを明らかにすることである。このような訳を提案するものではなく、*anterior* であることが伝わればよい。
- 14 注釈 (Mp II 265) 等に従い、テキストの読みを *sacca* から *sabba*-に変更した。